



くろかわ・きよし
1936年生まれ。東京
大大学院修了。医学
博士。米UCLA医学
部教授や東大医学
部教授を経て03年
から現職。著書に「日
本の洗濯」など。

研究者は出身大飛び出し他流試合挑め
政府による規制や摘発は防止の最終策

人は間違える。間違いから
学び、正し、成長していく。
これが教育だ。研究者も例外
ではない。捏造や剽窃のよ
うな不正が起きた時、学生や
院生、指導教員、研究責任者、
学部長、学長などそれぞれの
立場でどう対応するのか。国
内の「ものさし」だけで考え
ると、間違うことも多い。

国際競争も激しさを
増し、研究者間の競争、
時には国民からの期待
も研究者の圧力とな
る。名誉、権力、出世
などの世俗的誘惑もあ
る。誤りは小さなうち
に正さないと、時に問
題が大きくなりすぎ、
社会的な影響を及ぼ
す。「嘘の上塗り」は
高くつく。

日本学術会議は03年
6月、研究者の行動規
範（ガイドライン）の
作成や、不正の有無を
公正に審理する公的機
関の設立などいくつか
の提言をした。その後
も、国内外での不正行
為に対する具体的な取
り組み例の調査や不正
行為防止に関するシン
ポジウムを通し、社会
に広く発信してきた。
意図的な不正行為は
研究者以前の問題だ
が、研究者が所属する

コミュニティ独特の慣習に
コミニティ独特の慣習に
埋没し、本人が間違いに気が
つかないこともある。研究室
内での議論や学会発表などそ
れぞれのレベルで「同僚（ピ
ア）」による開かれた討論や
追試が必要だ。間違いを小さ
なうちに訂正すれば不正防止
になり、科学者社会の信頼に
つながる。日本学術会議は、
こうした自律する科学者社会
の構築を目指している。
不正の背景に、科学者が所
属する社会自体が抱える問題
が潜んでいる場合もある。

日本では、大学を出ると同
じ大学の大学院へ進み、教授
の手法を学ぶ。日本社会は終
身雇用、年功序列、官尊民卑、
「純粹培養」の「タテ社会」

「タテ社会」の見直しを

が基本で、大学も例外でない。
内部からの批判や反対意見は
出にくく、不正行為が発生し
やすい土壌がある。
米国では、大学、大学院、
博士研究員（ポスドク）と進
む育成過程で、他の大学や指
導者のもとからやって来た人
たちが「混ざり」、「他流試
合」する制度になっている。

「他流試合」をする
からこそ、若者に先生
を超えようとするエネ
ルギーが生まれ、すぐ
れた研究者が「芽」を
出し、新しい分野を開
拓し、「独立した」研
究者へ成長する。「混
ざる」プロセスを通し
て、若い研究者は優れ
た「お手本」にめぐり
合い、指導者の評価と
信頼が共有され、研究
者社会全体の質が向上
し、社会の信頼が構築
される。

その米国で、研究の
不正行為防止を進める
機関が米研究公正局
（ORI）だ。当初は告
発に基づく独自調査に
力点を置いていたが、
後に予防に力点を置
き、科学者の倫理教育
を進め成果を上げた。
政府による規制や不
正の摘発は最終手段で
ある。まずは、日本に
固有の課題は何かを科学界が
判別し、時代により適した解
決策を見つける必要がある。
さもなければ、日本の科学者
社会に自浄作用があるとは認
識されないだろう。

日本学術会議は科学者社会
を代表する組織として、研究
者一人一人がそれぞれの立場
で社会的責任を認識し、行動
することを呼び掛けていく。